

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、10月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（10月）

令和4年9月30日
愛媛県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和4年9月22日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（9月24日～10月23日）

< 1か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

< 予報のポイント >

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) トビイロウンカ

（令和4年9月16日付け 病害虫防除技術情報第8号参照）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上中旬の定点調査では、19圃場中6圃場で発生を確認しており、やや多の発生である。

(イ) 9月上旬に県下で初めて坪枯れ被害が確認されたが、その後も県下各地で坪枯れ被害が散見されている。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発生は圃場間差や圃場内での偏りがあるため、圃場全体を注意して見回り黄化症状などの変化を見逃さないよう注意する。

(イ) 定期防除後も黄化や坪枯れ症状がみられたら、農薬使用基準を留意し早急に応急防除を実施する。

(ウ) 坪枯れ被害の発生圃場では、可能な限り収穫を早めて被害の拡大を防ぐ。

大 豆

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月中下旬の調査では、ハスモンヨトウによる被害はやや少である。

(イ) 県下7カ所の性フェロモントラップによる誘殺数は、9月第4半旬に急増し全地点で多い（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 産卵は卵塊で行われ、ふ化後間もない幼虫は集団加害し白変葉となるため、見つけ次第除去し捕殺する。

(イ) 幼虫が成長すると薬剤の効果が低下し、食害量も増加してくるので、若齢幼虫期の散布が有効である。

(ウ) 抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

(2) 吸実性カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 県下6地点のミナミアオカメムシの予察灯への誘殺数は、4地点で平年より多い（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。

(イ) 9月中下旬の調査では、圃場における成幼虫の発生は多である。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 莢伸長終期から子実肥大終期にかけて吸汁被害が多くなるため、防除は子実肥大期に10～15日おきに2回程度実施する。

(イ) ミナミアオカメムシは着莢以降も圃場をよく観察し、発生が確認されれば防除する。特に、収穫終了後の普通期水稻からの移動により密度が高まることがあるので注意する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 9月の定点調査では、葉及び果実の発生はやや多である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされているが、9月の2回の台風による樹体の風傷が多いとみられ、感染が助長されていると考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、薬剤散布や防風対策を講じる。

(ウ) ミカンハモグリガの食害痕は、病原細菌の侵入箇所となるため夏秋梢の除去、防除を徹底する。

(エ) 本病に罹病性の品種は、夏秋梢や果実の発病に特に注意する。

(2) 褐色腐敗病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月の定点調査では発生を確認していない。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされているが、9月の2回の台風による雨水の跳ね上がりなどにより感染が助長されていると考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の排水や通風を良くする。

(イ) 敷き藁やマルチなどで、雨水による病原菌の跳ね上がりを防ぐ。

(ウ) 発病果は二次伝染の原因となるので、発病果を発見次第園外に処分する。

(エ) 薬剤防除は、発生してからでは十分な効果が得られないので、発生前（降雨前）に防除する。

(3) 貯蔵病害（緑かび病・青かび病）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 極早生の果実品質は、糖度が平年並、クエン酸がやや低い。また早生・普通品種では糖酸ともにやや高い傾向である。

(イ) 9月の2回の台風による果実の風傷が多いと考えられる。

(ウ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 収穫時に果皮に傷をつけないように、収穫果は丁寧に扱う。また、降雨直後など果面が濡れている場合には収穫しない。

(イ) 収穫後の予措、貯蔵中の温湿度管理を適正に行い、腐敗果は発見次第除去する。

(ウ) 収穫の1～2週間前に薬剤散布を必ず行う。

(4) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 9月の調査では、発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないように丁寧に散布する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月の調査では、果実の発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内をこまめに観察し、発病枝及び発病果実は早期に除去し園外へ持ち出す。

(イ) 果実の感受性が高まる時期となるため、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を行う。

果樹共通 (かんきつ、かき、なし、キウイフルーツ)

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 県下8地点の予察灯及び県下5地点の性フェロモントラップによる誘殺量は全地点で少ない(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 県内10地点(9月中旬調査)のヒノキ球果の結実量は少ない傾向である。また、ヒノキ樹での掬い取り虫数は少ない(下表参照)。

(ウ) 各調査地点から採集した球果の口針鞘数は平均21.7と多く、ヒノキ球果からの離脱の目安とされる25個/球果を超える地点は3地点で認められた(下表参照)。

(エ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 飛来は地域、園地により偏ることがあるため、園内を見回り飛来初期に防除を行う。

(イ) 台風等の通過後、一時的に果樹園へ飛来する場合がありますので注意する。

(ウ) 収穫期が間近となる果樹では薬剤の選択に注意する。

表 ヒノキ球果調査結果(2022年9月調査)

調査地	結実量	10回すくい取り虫数						虫数 合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	少	1	0	0	0	1	0	2	19.0
西条市丹原町田滝	極少	0	0	0	0	0	0	0	16.2
今治市大西町脇	極少	0	0	0	0	0	0	0	25.2
松山市立岩	少	0	0	0	0	0	0	0	18.4
松山市菅沢	並	0	0	0	0	1	0	1	67.5
松山市久谷	少	1	0	0	0	0	0	1	14.1
久万高原町明神	並	0	0	0	0	0	0	0	41.3
内子町五十崎	極少	0	0	0	0	0	0	0	0.8
西予市城川町土居	極少	0	0	0	0	0	0	0	6.1
西予市宇和町西山田	極少	0	0	0	0	0	0	0	8.5
愛南町城辺緑	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
虫数平均(R4)		0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.4	21.7
平年値(H24~R3)		1.6	0.6	0.2	0.0	0.0	0.1	2.3	12.1
今年の順位(H24~R3)		10	10	9	8	1	8	10	1

野 菜

(1) アブラムシ類 (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 9月の調査では、夏秋なすで並、夏秋きゅうりでやや少の発生である。

(イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺量は少ない(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(ウ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (イ) いちごでは天敵やミツバチへの影響を考慮し、密度が高まらないよう早めに防除を実施する。

(2) ハダニ類 (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

- (ア) 9月の調査では、さといもで多、夏秋なすでやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。
- (イ) 同一薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- (ウ) 圃場周辺の除草に努める。
- (エ) いちごでは天敵やミツバチへの影響を考慮し、初期防除を徹底する。

(3) ハスモンヨトウ (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

- (ア) 9月の調査では、さといもで20葉当たりの寄生虫数が並の発生である。
- (イ) 県下7カ所の性フェロモントラップによる誘殺数は、9月第4半旬に急増し全地点で多い(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) いちごでは、卵塊やふ化後間もない幼虫の集団加害葉を発見次第摘除処分する。また、ハウス開口部からの成虫の侵入抑制のため、防虫ネットを設置する。
- (イ) 幼虫が成長すると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期(体長が1cm未満)の散布が有効である。
- (ウ) 農薬使用に当たっては、作物ごとの登録を確認し、抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

(4) オオタバコガ (冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺量は、平年並～やや多で推移している。(病虫害防除所ホームページの調査データを参照)。
- (イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(5) シロイチモジヨトウ (冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺量は、5地点のうち4地点で多く推移している(病虫害防除所ホームページの調査データを参照)。
- (イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病虫害発生予察情報・各種調査データ】

愛媛県病虫害防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病虫害対策 > 愛媛県病虫害防除所ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病虫害等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。